Ⅲ　宮跡内その他の発掘調査

①　佐伯門東方の調査（第106次）

調査は、25次調査において佐伯門の東で検出され、一部整備復原されている宮内道路を第一次朝堂地区まで延長整備する計画に先立って、延長部の確認を目的として行った。調査地は、佐伯門の東方約230 mの地点（6ACD－Ⅰ・6ACQ－C・6ACE－G・6ACR－A）にあたり、約750 m^2を発掘した。6ACQの一部は、昭和51年夏、埋蔵文化財センターの研修発掘区と重複する。

調査は、7月日1に開始し、同月30日に終了した。以下、調査地区を南北に分断する用水路を境にして、北半部（6ACQ・6ACD）と南半部（6ACR・6ACE）に分けて報告する。

1　遺　構

北半部には、整地土は見られず、遺構はすべて地山面で検出した。地山面は、北西部が高く、東・北に向って下降している。検出した奈良時代の遺構は、東西溝3条（SD8810・SD8820・SD8844）・南北溝（SD8830）・掘立柱建物（SD8800）・折敷埋置施設（SX8845）である。

SD8844の東半部は、中世の井戸・近世の井戸で分断されているが、断面梯形状の素掘りの溝で、東に向って流れる。最大幅1.1 m、深さ約0.25 mを測る。SD8820は、佐伯門の中軸線に沿って東に流れる。最大幅2.45 m、深さ約0.3 mを測る。SD8810は削平が著しく、途中で止切れるが、溝底レベルは西に低い。検出した長さは短かく、どちらに流れていたかは断言できない。SD8830は、SD8820に合流する。南延長部は土壙で切られ、SD8844との関係は把めなかったが、南トレンチで検出されなかった事より、おそらく、SD8844とも接続するものと思われる。SB8800は、3×2間以上の東西棟で、いずれの掘方にも柱痕跡があり、それにより柱間を復原すれば、梁行10尺、桁行8尺となる。SX8845は、SD8820の溝底から検出されたが、小さな土壙内に、底に瓦片を敷き、側面に平瓦と面戸瓦を置き、折敷を固定した施設である。

南半部は整地土がかなり残っていたが、近世の水溜などでかなり撹乱されていた。検出した奈良時代の遺構は、SX8843だけであり、SX8843は、断面V字状に掘り込んだ溝状遺構で、H字状のプランで連接していた。掘り込みは地山面から行われ、東掘方は整地土で 被れていた。数ケ所、断ち割りを行ったが、遺物は皆無で、版築のような整然とした層序ではないが、粘土と砂質土の薄い層が互層をなしていた。SX8843の性格については不明である。

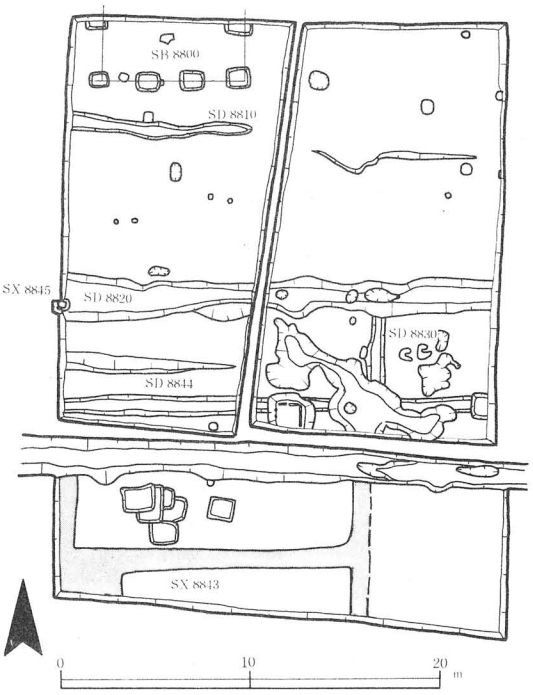
2　出土遺物

木製品としては、SX8820の置敷1点と円板状木製品の破片4個がSD8820から出土した。南半部土壙からは、中世以降の手桶が1点出土している。土器類は平箱3ばい程出土した。SD8820・8844出土の土器はⅢ～Vに編年される。軒丸瓦は、4型式5種（6233・6284・6225・6282）と不明の1点を含め、総数6点、軒平瓦は、6型式（6641・6642・6667・6681・6711・6714）と不明1点あわせて8点が出土した。面戸瓦は4点あり、いずれも、蟹面戸で藤原宮式の特徴を備えている。

3　まとめ

発掘区の北と南では、様相が異なり、両地区の関連は水路で分断され、調査面積が狭いことと相俟って、把握できなかった。しかし、SD8844とSD8820の間は、周辺に較べ、地山面が高く、ここに築地を想定すれば、両地域の様相の異なる点は、官衙ブロックの差として説明する事ができよう。今回の調査では、築地遺構の積極的な証左を検出しなかったので、あえて築地として遺構番号を付けなかった事を付記したい。

今回の調査では、道路敷らしい遺構は検出されなかった。道路敷想定部の中軸線に沿ってSD8820が流れていて、出土遺物より奈良後半頃まで存続するという知見が得られた。



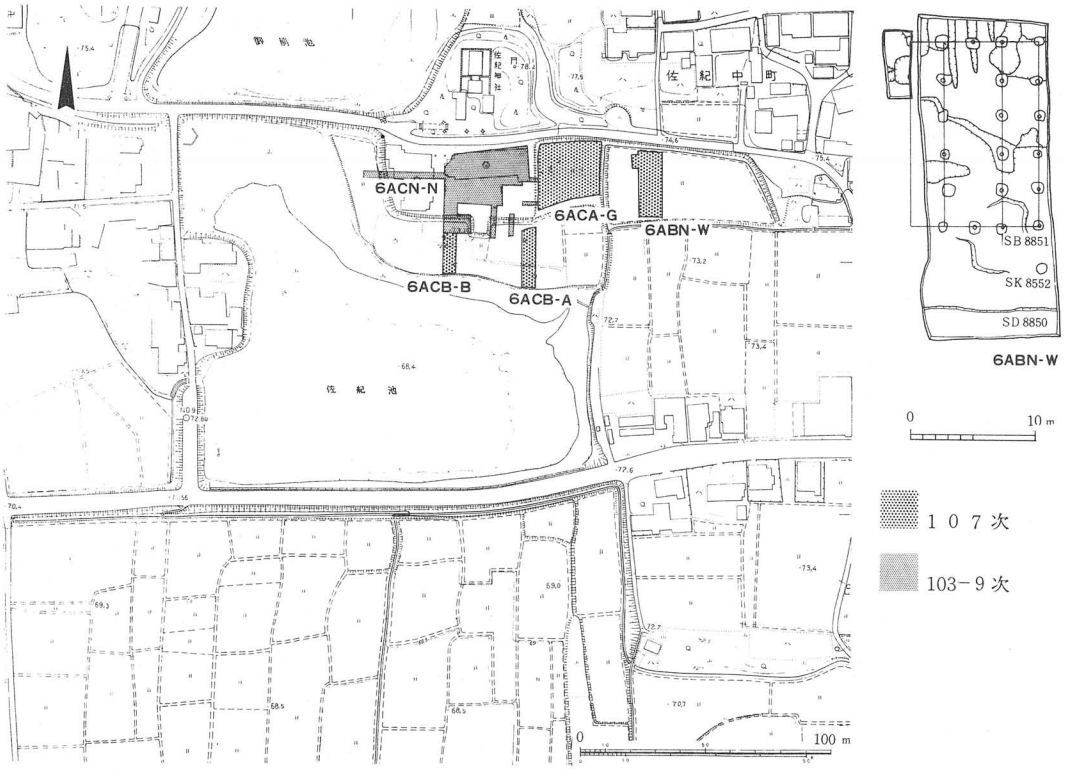
第5図　第106次調査遺構図

② **佐紀池東地区の調査**（第 103 － 9 次、第 107 次）

佐紀池の東方で第 103 － 9 次、第 107 次の発掘調査を実施した。第 107 次 の発掘調査は 6ABN－W、6ACA－G、6ACB－A・B 区で昭和52年11月24日から同年12月27日まで、第 103－ 9 次の発掘調査は 6ACA－N 区で昭和53年 1 月 9 日から同年 2 月 8 日まで行なった。発掘面積は第 107 次が 1,130 ㎡、第 103 － 9 次が 900 ㎡である（第 6 図）。

1　遺　構

6ABN－W区と 6ACB－A区で奈良時代の掘立柱建物 1 棟、溝 1 条、土壙 9 基を検出した。それ以外の地区は近・現代の撹乱による破壊がおよび、奈良時代の遺構はない。6ABN－W区では自然層が東北から西南に向って傾斜し、これに沿って整地土が斜めに堆積する。整地土は、含有機質灰色土の上に黄色粘質土、含礫暗灰色粘質土、含礫黄色粘質土、黄色砂質土の順で堆積する。しかしトレンチの北半部には整地土はない。床土の下は自然層である。



第 6 図　第 103－9，107 次調査位置図

含礫暗灰色粘質土上面で掘立柱建物　SB 8851を検出した。桁行５間、梁行４間の東西廂をもつ南北棟。柱間寸法は桁行が３ｍ（10尺）、梁行が2.25ｍ（7.5尺）である。東廂の出は、３ｍ（10尺）。西廂の出は、2.4ｍ（８尺）と推定。

トレンチの南端で東西溝SD 8850を検出した。SD 8850の南の肩はトレンチの南に延びるものと推定。黄色砂質土の上面で検出し、溝の内部からは第Ⅲ期の軒瓦が出土した。大膳職の北を画す溝とみられる。

トレンチの随所で土壙を検出した。円形の１例を除いて、土壙の掘形は不整形である。壙底は凹凸が著しい。

6ACB－A区のトレンチ南半で奈良時代の整地土と土壙１を検出した。6ABN－W区同様、自然層が南に向って傾斜し、整地土はわずかしか残っていない。

6ACA－N区は周囲より比高で1.5ｍ程地形が高く、奈良時代の遺構の検出が期待できた。しかし近・現代の溝状遺構が大規模にわたって、この地区を破壊しており、奈良時代の遺構を検出することはなかった。6ACA－G、6ACB－B区も撹乱による破壊によって、奈良時代の遺構を検出することはなかった。

2　遺　物

瓦類、土器類が出土した。SD 8850から第Ⅲ期の軒瓦が出土したほか、6ACB－A区の整地土からも第Ⅰ期の瓦類が出土した。前者は、軒丸瓦6282が２点、軒平瓦6721が４点、6684Ｃが１点である。

出土された器類に完品はなく、いずれも小片である。そのうちに蹄脚硯１点がある。脚台部の径28.5㎝の大型品で、外面に自然釉がかかる。硯部と脚台部を一連で成形する蹄脚硯Ｂに属し、蹄脚硯のなかでは新しい型式のものである。

3　まとめ

佐紀池の東岸に接する地区は奈良時代以降に地形の改変をこうむっており、概して奈良時代の遺構の遺存は悪い。一方、SD 8850は大膳職の北を画す溝とみられ、それより北側に遺構の存在が明らかとなった。とりわけ掘立柱建物SB 8851を検出したことは、宮の北辺地域の性格をきわめてゆく上で、ひとつの手がかりとなろう。